

旅 の こ と ば



沢木耕太郎

さわきこうたろう

ノンフィクション作家・エッセイスト・小説家。1947年、東京都生まれ。横浜国立大学経済学部卒業。ほどなくルポライターとして出発し、1979年『テロルの決算』（文藝春秋）で大宅壮一ノンフィクション賞、1982年『一瞬の夏』（新潮社）で新田次郎文学賞を受賞。26歳のときに香港からロンドンまでを旅した自らの旅行体験に基づく『深夜特急』（新潮社）は、バックパッカーのバイブルとなった。

世界が開ける

私は普通の中中学生であり高校生であったので、英語の授業があまり好きではなかった。だから、ほとんど勉強もせず、大学入試のためにほんの少し単語を覚えてくれたら良かった。

大学に入っても、まったく勉強しなかったから、英語を話せないのはもちろんのこと、ろくに英文も読めなかった。

そんな私がフリーランスのライターとなり、仕事でハワイに行ったのは二十四歳のときだった。

ある日、年長の日本人建築家と、その夫人である彫刻家と、ワイキキにあるシーフード・レストランで食事をするようになった。

出されたメニューから、サラダとメインディッシュとして白身魚のムニエルを注文すると、ウェイターに何か訊ねられた。まったくわからなかった私が困惑していると、彫刻家の夫人がやさしい口調で教えてくれた。

「サラダのドレッシングはどうするのか訊いているのよ」

私は恥ずかしくなり、慌ててフレンチ・ドレッシングはありますかと訊ねた。

「イズ・ゼアー・フレンチ・ドレッシング？」

すると、今度はウェイターの方がまったくわからないと困惑したような顔になり、助け舟を求めるように彫刻家の夫人を見た。

それを受けて、彫刻家の夫人が私にまたやさしく言った。「そういうときは〈HAVE〉を使えばいいのよ。あなたは何かを持っていますかと訊ねるの」

言われたとおり、「ハヴ・ユー・フレンチ・ドレッシング？」と訊くと、ウェイターはすぐに理解してくれ、フレンチ・ドレッシングというものはないけれど、サウザンドアイランド・ドレッシングならあると言った。そこで私は、サラダにサウザンドアイランド・ドレッシングなるものをかけてもらうことにした……。

たぶん、このとき、私は初めて英語というもの、外国語というものと出会ったのだと思う。たったひとつの言葉、たったひとつの言い回しによって世界が開けるものだという事を腹の底から理解することになったからだ。